

第五章 商品の実価格と名目価格——労働単位と貨幣単位で測る価格

位で測る価格

人の豊かさは、生活の必需・利便・娯楽をどれだけ享受できるかで決まる。だが分業が行き渡ると、自分の労働で賄えるのはその一部にすぎず、残りの大半は他人の労働に頼る。したがって裕貧は、購入するなり指図するなりして動員できる他人の労働量に比例する。ゆえに、自家使用ではなく交換のために保有する財の価値は、それによって買い、または指図して使える労働量に等しく、労働こそがあらゆる商品の交換価値の実在の尺度である。

あらゆる物の本当の価格は、それを手に入れるために支払う労働（骨折り）である。手元の物を処分・売却・交換する人にとっての真の価値は、自分の労働をどれだけ節約し、他人の労働をどれだけ引き受けさせられるかで測られる。金や商品で買う場合も、働いて得る場合も、支払いは突き詰めれば労働であり、金や商品はその労働を節約する媒体として一定量の労働価値を運び、その時どきで同等と見なされる品と交換される。労働こそ万物に最初に支払われた代価、すなわち原初の購買力であり、世界の富はもと

もと金銀ではなく労働で買われた。その価値は、保有者が新たな産物に替える際に雇い入れ、動員できる労働の量に正確に等しい。

ホッブズは「富は力だ」と述べるが、巨額の財産を得たり相続しただけで市民的・軍事的権力が自動的に伴うわけではない。富はそれらを得る手段にはなっても、所有そのものが権力を保証しない。富が直ちに与えるのは購買力、すなわちその時々々の市場にある労働とその産物を一定の範囲で指図できる力であり、個人の富の多寡はこの力の及ぶ範囲（他人の労働や産物をどれだけ買い、動かせるか）に正確に比例する。ゆえに、あらゆるものの交換価値は、所有者に与えるこの力の大きさに等しい。

もともと、すべての商品の交換価値の真の物差しが労働だとしても、日常の評価はそれだけでは定まらない。労働量は時間だけでは比べられず、負担の厳しさや必要な熟練・工夫も勘案される。重い仕事の一時間が軽作業の二時間を上回ることもあれば、十年かけて習得した技の一時間が平凡な仕事の一カ月分に相当することもある。しかし、その厳しさや巧みさを正確に計る尺度はないため、現実の取引では異なる労働の産物を交換するときに割増しや割引で調整され、精密な測定ではなく市場での駆け引きの末に、日常生活に足るおおよその均衡に落ち着く。

さらに、商品是一般に労働よりも他の商品と交換される場面が多く、比較も他の商品とのあいだで行われがちである。ゆえに交換価値は、その場で買える労働量ではなく、何らかの他商品の数量で評価するのが自然だ。しかも多くの人びとにとっては、抽象概念である労働量より、目に見える具体物である特定の商品量のほうが直感的で理解しやすい。

しかし、物々交換が廃れ、貨幣が普遍的な取引媒体になると、商品はまず貨幣と交換されるようになる。肉屋は肉をパン屋や醸造家に直接持ち込まず、市場でいったん貨幣に替え、その貨幣でパンやビールを買う。受け取る貨幣の額がその後に買えるパンやビールの量を決めるため、彼には、媒介なしにやり取りする貨幣の額で価値を測るほうが、別の商品量で測るより自然で明快である。したがって、「肉は一ポンド当たり三〜四ペンス」とは言っても、「パン三〜四ポンド分」や「薄いビール三〜四クォート分」とは言いにくい。こうして商品の交換価値は、労働量や他商品の量ではなく、貨幣の量で見積もるのがより一般的になった。

金や銀も他の商品と同様に価値が上下し、安い時も高い時もある。一定量の金銀で買える労働や交換できる財の量は、その時代に知られた鉱山の豊凶に左右され、たとえば

新大陸の豊かな鉱山の発見で十六世紀の欧州では金銀の価値がそれ以前の約三分の一に下がった。採掘から市場までに要する労働が軽くなれば、その金銀で買える労働も減る。

これはきわめて大きな変動だが、歴史上の唯一の例ではない。自らの長さが一定しない「フット」「ヒロ（一尋）」「一握り」が正確な尺度にならないのと同様、価値が常に揺れる商品は他の価値の厳密な物差しにならない。これに対して、同量の労働は、いつでも労働者にとって等しい価値である。ふつうの健康・体力・気力、技能・熟練のもとで、彼は常に同じだけの安逸・自由・幸福を手放すからだ。彼が支払う「価格」は一定で、見返りの財の量がどう変わっても変わらない。得にくく多くの労働を要するものは高く、容易でほとんど労働を要しないものは安い。したがって、自己の価値がぶれない労働こそが、いつでもどこでも万物の価値を測る最終かつ実在の尺度であり、労働は実価格、貨幣は名目価格にすぎない。

同じ量の労働は、労働者にとっては常に同じ価値である。しかし雇う側には、あるときは高く、あるときは安く見える。多くの財で買う場合も少ない財で買う場合もあるため、労働の価格が動いているように映るが、実際に上下しているのはその時々の方の財の側であって、労働そのものではない。

したがって一般的な用法では、労働も商品と同様に実価格と名目価格をもつ。実価格はその労働で得られる生活必需品や便益の量、名目価格はその労働に支払われる貨幣の額である。労働者の豊かさや処遇の良否は、名目ではなくこの実価格によって定まる。

実価格と名目価格の区別は思弁ではなく実務に有用である。実価格（労働で測った価値）は常に同じだが、金銀の価値が変動するため、同一の名目額でも実質価値は大きく異なり得る。ゆえに、土地を売却して永久地代（恒久年賦）を留保し、その価値を一定に保ちたいなら、受益者のためにも地代を一定額の貨幣で固定しないことが重要である。固定してしまうと、価値は二重に変動する。第一に、同一額面の貨幣に含まれる金銀量が時代で変わり、第二に、同量の金銀自体の価値も時代で変わるからである。

君主や主権国家は短期の利害から貨幣の品位（純金属量）を下げがちで、引き上げることはほとんどない。その結果、各国の鑄貨に含まれる金属量は概して減少し、金銭で定めた地代の実質価値はほぼ例外なく目減りする傾向が強い。

新大陸の鉱山の発見は欧州における金銀の価値を押し下げ、この下落は（私には確証はないが）なお緩やかに続き、当面は長期化すると一般に見なされている。したがってこの前提に立つなら、金銭建ての地代の実質価値は上がるよりも下がる可能性が高く、

支払いをスターリング何ポンドといった額面の貨幣ではなく、純銀や一定品位の銀の何オンス建てで取り決めても、この点は変わらない。

穀物建ての地代は、貨幣額面が変わらなくても貨幣建ての地代より価値が保たれやすい。エリザベス一世治世第十八年法は、大学の借地の地代の三分の一を穀物で留保し、現物納か最寄りの公設市場の時価で支払うよう定めた。ブラックストンによれば、この穀物地代の収入は当初は全体の三分の一にすぎなかったのに、今では残りの三分の二からの収入のほぼ倍に達するのが普通である。すなわち大学の旧来の貨幣地代は、当時受け取れた穀物に照らして価値が約四分の一に低下した。しかもフィリップとメアリー以降、貨幣の呼称も一定額のポンド・シリング・ペンスに含まれる純銀量もほぼ不変であるため、この減価は銀そのものの価値低下による。

銀の価値低下に加え、同じ額面の貨幣に含まれる銀量まで減ると、損失はいっそう大きくなる。貨幣単位の改定がイングランドよりはるかに激しかったスコットランド、さらにそれを上回ったフランスでは、当初はかなりの価値があつた古い地代が、この過程でほとんど無価値になった。

長期で見れば、同量の労働は、金銀などの同量よりも、労働者の糧である穀物の同量

のほうか、より等価に買われやすい。ゆえに同量の穀物は時代を越えて実質価値をより保ち、ほぼ同じだけ他人の労働を買って指図できる力を与える。ただし厳密に一定ではない。労働者の生計、すなわち労働の実価格は、富へ前進する社会では厚く、停滞では薄く、後退ではさらに薄いからである。それでもどの時点でも、あらゆる商品は、そのとき買える生計費の量にに応じて、より多くのまたは少ない量の労働を買う。したがって地代を穀物建てで示せば、その変動は「一定量の穀物で買える労働量」に限られるのに対し、他の商品建ての地代は、さらに「その商品の一定量で買える穀物量」の変動にもさらされ、二重の不確実性を負う。

留意すべきは、穀物建て地代の実質価値は世紀単位の長期では貨幣建てより目減りしにくい一方、年ごとにはむしろ大きく振れることである。賃金の貨幣価格は年々の穀物相場には連動せず、生活必需である穀物の平均的な常態価格（平年水準）に基づいて決まりやすい。この平均価格は銀の価値に左右され、銀価は鉱山の豊凶、すなわち一定量の銀を市場に運ぶのに要する労働（とそれに伴う穀物消費）によって決まる。銀価は世紀スパンでは大きく動き得るが年次の変動は小さく、半世紀から一世紀ほぼ同水準が続くことも珍しくない。したがって他の条件が同じなら、その期間中は穀物の平均的な賃

幣価格も賃金の貨幣価格もおおむね据え置きで推移する。他方、短期の穀物相場はしばしば大きく跳ね（例えば、一クォーター二十五シリングが五十シリングに倍増する）、その局面では穀物地代は名目でも実質でも前年の倍となり、他人の労働や多くの財に対する購買・指図力も倍増する。賃金の貨幣価格（ならびに多くの物価）は、こうした短期の乱高下の最中も概して動かない。

結論として、労働こそが価値の唯一の普遍かつ正確な尺度であり、いつ・どこでも諸商品の価値を比較できる唯一の基準である。世紀をまたぐ実質価値は銀の支払量では、年ごとの実質価値は穀物の量では正しく測れないが、労働量なら長期でも短期でも最も正確に見積もれる。長期比較では同量の穀物のほうが同量の銀よりも同じ労働量をより確実に示し、短期比較ではその逆に同量の銀のほうが同量の穀物よりも同じ労働量をより確実に示す。

もっとも、永久地代の設定やきわめて長期の賃貸借では、実質価格と名目価格を区別することが有効だとしても、日常の売買においてはその区別はほとんど意味をもたない。同じ時と場所においては、すべての商品の実価格と名目価格は厳密に比例する。ロンドン市場を例にとれば、ある品に支払われる貨幣が多いほど、その場で雇える労働も多

くなる。ゆえに、その時点・その地点に限っては、貨幣はあらゆる商品の実際の交換価値を測る正確な尺度である。ただし、この効力はあくまで同時同所に限られる。

離れた地域同士では、商品の実際の価値と貨幣での価格は必ずしも比例しない。それでも移出入を担う商人にとって重要なのは、仕入れに払う銀と売却で受け取る銀の差である。たとえば広州では銀〇・五オンスがロンドンの一オンスより多くの労働や生活必需品を買うことがある。このとき広州で〇・五オンスの値が付く品は、現地ではロンドンで一オンスの品より実は高い価値を持ちうる。それでもロンドンの商人が広州で〇・五オンスで仕入れ、ロンドンで一オンスで売れば、利回りは百パーセントで、両地で銀の価値が等しいと仮定した場合と同じ利益になる。広州の〇・五オンスの購買力がロンドンの一オンスを上回るかどうかは彼の計算には入らない。ロンドンでは一オンスは〇・五オンスのちょうど倍の購買力を持ち、彼が狙うのはまさにその確かな倍差だからである。

したがって、売買の可否を最終的に決め、価格に関わる日常の経済活動の大半を左右するのは名目（貨幣）価格である。ゆえに、名目（貨幣）価格が実価格よりも強い関心を集めてきたとしても不思議ではない。

もつとも本書では、特定商品の時代や地域をまたぐ実質価値、すなわち持ち主が場面ごとにどれだけ他人の労働を支配できたかを比較するのが有益な場合がある。その際に照合すべきなのは支払われた銀の量そのものではなく、その銀でどれだけの労働が買えたかである。とはいえ、離れた時代や地域の賃金水準を正確に突き止めるのはほとんど不可能だ。他方、穀物価格は体系的な記録は多くないが広く知られ、歴史家や著述家もしばしば言及している。したがって、賃金と常に厳密に比例するわけではないものの、賃金水準を推し量る最も近い代用尺度として穀物相場に頼らざるを得ない。以下、この種の比較をいくつか示す。

産業の進展に伴い、商業諸国は複数の金属を貨幣として併用するのが便利だと考えるようになった。大口の決済には金、通常・中規模の取引には銀、少額には銅などの安価な金属を充てる。ただし価値の尺度としては三つのうち一つに特に定めるのが通例で、多くの場合それは取引の手段として最初に用いられた金属であった。いったん（他に貨幣がなかった時代に）それを標準に定めると、その必要が薄れた後も、一般にその標準は維持された。

ローマ人は第一次ポエニ戦争の五年前まで銅貨しか用いず、その頃になって初めて銀

貨の鑄造を始めた。ゆえに共和国期の価値の基準は一貫して銅に置かれ、帳簿はアスマタはセステルティウスで付けられ、資産の評価もその単位で行われた。アスは常に銅貨を指し、セステルティウスは「二アス半」を意味する語である。したがって、セステルティウスは起源としては銀貨であっても、価値は銅建てで見積もられ、多額の債務者は「他人の銅を多く抱える者」と言い表された。

ローマ帝国崩壊後、その跡地に成立した北方諸民族は建国の初期から銀貨を用い、当初は金貨も銅貨もほとんど流通しなかった。イングランドでもサクソン時代にはすでに銀貨があり、金貨の本格鑄造は十四世紀のエドワード三世まで乏しく、銅貨は十七世紀のジェームズ一世まで現れなかった。このためイングランド（おそらく他の近代欧州諸国でも）では会計は銀建てが基本となり、商品や資産の価値も概ね銀で算定され、個人の財産はギニーの枚数ではなく、それに見合うスターリング・ポンド額で示するのが通例となった。

当初、各国で法的に有効な弁済は、その国が価値の標準と定めた金属貨に限られた。イングランドでは金貨が鑄造されてからもしばらく金は法定通貨とされず、金銀比価も法で定めず市場に委ねられたため、債務者が金で支払おうとしても債権者は受領を拒む

か、当事者の合意した評価でのみ受け取れた。銅貨も当時は小額銀貨の釣り銭を除き法定通貨ではなく、この体制下では「標準金属」と「非標準金属」の差は名目以上に実質的な意味を持った。

やがて人々が金・銀・銅の貨幣の使い分けと相対価値に通じるようになると、多くの国がその比率を法で定め、たとえば所定の重量と純度のギニー一枚を二十一シリングに等しく、同額の債務の法定弁済とすることが便利だとされた。この制度が続ぎ、規定比率が維持されるあいだは、「標準金属」と「非標準金属」の違いはほぼ名目上の差にとどまる。

ところが、公定比率を改めると、「標準金属」と「非標準金属」の区別は少なくとも見かけ上、再び名目以上の意味をもつ。たとえばギニーの公定価値を二十シリングに下げると、帳簿や債務の多くが銀建てである以上、銀で払う額は不変だが、金で払う額は前者で増え、後者で減る。すると銀のほうが安定して見え、銀が金の価値を測る物差しで、金は銀の物差しではないかのように映る。しかしこれは会計や金銭債務を金ではなく銀で表示する慣行が生む見かけにすぎない。たとえばドラムモンド氏の二十五ギニー／五十ギニー建て手形は、改定後も二十五／五十ギニーで決

済で、払う金の量は同じだが、銀に換算した必要量は大きく変わる。この場合はむしろ金のほうが不変に見え、金が銀の価値を測る物差しに見えるだろう。もし会計と債務表示の慣行がこの方式に一般化すれば、価値の標準として重んじられる金属は銀ではなく金になる。

実際には、金銀銅の公定比価が維持されているかぎり、最も高価な金属がコイン全体の価値を事実上決める。常衡で半ポンドの粗銅を含む銅ペンズ十二枚は地金としては銀七ペンスにも満たないが、「十二ペンス＝一シリング」という規定により市場では一シリングとして通用する。金貨改鑄以前でも、ロンドンの金貨の摩耗は多くの銀貨より軽かったが、それでも摩耗の激しい二十一シリングは（摩耗の少ない）一ギニーとしばしば等価と見なされた。最近の措置で金貨は流通貨として可能な限り標準重量に近づければ、官庁が金貨を重量でのみ受け取る方針を続ける限り、その水準は保たれる見込みである。他方、銀貨は改鑄前と同様に摩耗したままだが、市場では依然として、劣化した銀貨二十一シリングが良質な金貨一ギニーと等価に扱われている。

金貨の改鑄によって、その金貨と交換できる銀貨の価値は明らかに上がった。

イングランド造幣局では、金一ポンド重から四十四ギニー半（一ギニーは二十一シ

リング、計四十六ポンド十四シリング六ペンス）を鑄造するため、金貨一オンスの価値は三ポンド十七シリング十ペンス半となる。造幣税はなく、標準金地金を持ち込めば同量の金貨が無控除で返るので、これが造幣局価格、毎オンス三ポンド十七シリング十ペンス半である。ところが改鑄前は、標準金地金の市場価格が長年三ポンド十八シリング超、時に三ポンド十九シリング、しばしば毎オンス四ポンドに達した。摩耗や品位低下で多くの金貨が名目額に見合う標準金一オンスを欠いていたからである。改鑄後は、市場価格が毎オンス三ポンド十七シリング七ペンスを上回るとは稀になり、構図は「改鑄前〓市場∨造幣局」から「改鑄後〓市場∧造幣局」へと反転した。しかも市場相場は金貨払いでも銀貨払いでも同一である。ゆえに今回の金貨改鑄は、金地金に対する金貨の価値だけでなく、銀貨の価値も相対的に引き上げ、恐らく他の多くの財に対して同様の効果を及ぼした（ただし物価は多因子で動くため、必ずしも明瞭には現れない）。

英国造幣局は標準銀地金一ポンドから計六十二シリングの貨幣を鑄造するため、銀の造幣局価格は一オンス五シリング二ペンスとなる。金貨改鑄前、標準銀の市場価格は概ね五シリング四ペンス（五シリング八ペンス（最頻五シリング七ペンス）だったが、改

鋳後は五シリング三ペンス（五シリング五ペンスへ下落し、五シリング五ペンス超は稀である。それでも市価は造幣局価格の五シリング二ペンスまでは下がっていない。

英貨の金属比では、銅は実勢より高く、銀はやや低く評価されている。欧州の市場（フランス貨・オランダ貨）では純金一オンスは純銀約十四オンスに当たるが、英貨では約十五オンスと見積もられ、欧州より多くの銀が要る。それでも英貨で銅貨が高くとも英国の銅地金相場は上がらず、同様に銀貨の評価が低めでも銀地金相場は下がらない。銀地金は金に対する本来の比率を保ち、銅地金が銀に対する本来の比率を保つと同じである。

ウィリアム三世の銀貨改鋳後も、銀地金の市価は造幣局価格をわずかに上回っていた。ロックはその原因を銀地金の輸出許可と銀貨の輸出禁止に求め、銀地金の需要が銀貨より大きくなったためとした。しかし国内の取引で日常的に用いられるのは銀貨であり、その需要は輸出に回る銀地金よりはるかに大きいはずである。実際、今日の金でも地金は輸出可、金貨は輸出不可だが、金地金の価格は造幣局価格を下回っている。当時の英国の通貨制度は現行と同様に銀が金に比して過小評価され、改鋳不要と見なされた金貨が通貨全体の実質価値を事実上決めていた。この状況下で銀貨を改鋳しても銀地金の価

格を造幣局価格まで押し下げられなかったのだから、同様の改鑄でそれが実現する見込みは薄い。

銀貨を金貨と同程度の標準重量に戻すと、現行の金銀比では、ギニーは地金で買える銀よりも、銀貨としてなら多くの銀と交換されやすい。満重量の銀貨を溶かして地金にし、金貨に替え、ふたたび銀貨に戻してまた溶かすという循環で利ざやが出る。これを防ぐには、現行比率を何らかの形で改めるほかない。

不都合を抑えるには、金との本来の比率からの不足分だけ銀の公定評価をあえて上乘せし、あわせて銀はギニーの釣り銭までしか法定弁済に用いられない（銅貨がシリングの釣り銭までしか用いられないのと同様）と法で定めればよい。こうしておけば、銀貨の過大評価を口実に債権者が損をすることはない。銅貨の過大評価で債権者が不利益を受けないのと同じである。打撃を受けるのは銀行で、取り付け時に六ペンス硬貨の小口払いを重ねて時間を稼ぐ常套手段は封じられ、平時からより多くの現金準備を持たねばならなくなるが、債権者には確かな安全策となる。

金の造幣局価格は三ポンド十七シリング十ペンス半で、現行の良質金貨でも含有量は標準金一オンスを超えない。ゆえに標準金地金をこれ以上の価格で買う理由はないが、

金貨は地金より扱いやすい。イングランドでは鑄造手数料は無いものの、地金を造幣局に持ち込んでから金貨として戻るまで通常は数週間、繁忙の折には数箇月を要し、この待ち時間が実質的な小費用となって同量の地金より金貨がやや高く評価される要因となる。さらに、英貨での銀の評価が金に対する本来の比率で定まっていれば、銀貨を改鑄せずとも銀地金の市場価格は造幣局価格を下回りやすい。現行の擦り減った銀貨の価値でさえ、交換可能な良質金貨の価値に事実上連動して決まるからである。

金銀の鑄造に小さなシニョリッジ（鑄造税）を課せば、同じ重さの地金より貨幣の優位は一層大きくなる。鑄造という「型付け」がその小税分だけ価値を上乗せする理屈は、意匠が器物の価格を押し上げるのに等しい。この「貨幣V地金」の関係が強まれば、溶解は抑えられ、輸出の誘因も弱まる。非常時に一時的に流出しても、国外では地金値しか付かず国内ではそれ以上の購買力があるため、利ざやを求めて自然に還流する。実例としてフランスではおよそ百分の八のシニョリッジが課され、輸出された貨幣は自然に戻るとされる。

金銀地金の相場がときどき動くのは、他の商品と同様、需給の変化による。海難や陸上事故、鍍金・メッキ、レースや刺繍、貨幣や銀器の摩耗などで地金は常に失われるた

め、鉱山を持たない国はその目減りを埋める恒常の輸入を要する。輸入商は目先の需要に合わせ数量を調整するが、過不足は避け難く、余れば再輸出の手間と危険を嫌って平均価格をやや割って売り、足りなければ上乘せして売る。しかし、かかる一時的な振れを超えて市場価格が数年にわたり造幣局価格を一貫して上回る（または下回る）なら、その持続的な差は当時の鑄貨の在り方に起因する。すなわち、所定の額面の貨幣が本来の含有地金に比べて相対的に高い（または低い）価値を帯びているということであり、効果が安定して続くときは原因もまた持続的かつ安定している。

貨幣が価値の物差しとしてどれほど正確かは、流通する鑄貨が基準どおりの純金・純銀量をどれだけ保っているかに懸る。たとえばイングランドで四十四ギニー半が標準金一ポンド（純金十一オンスと割金一オンス）に厳密に等しければ、英金貨はその時その場の価格を理論上ほぼ極限まで正確に測り得る。だが流通で擦り減り、四十四ギニー半が概して一ポンドに満たず、しかも摩耗がまちまちとなれば、この物差しは他の度量衡と同様の不確かさを帯びる。現実の秤や物差しが常に標準どおりとは限らぬのと同じく、商人は理論値ではなく経験に基づく平均的な実測値で値付けし、貨幣が乱れるときは価格も本来の純分ではなく平均して実際に含まれる純金・純銀量に合わせて調整される。

ここで言う「貨幣価格」とは、硬貨の名称にかかわらず、その取引で実際に受け取る純金または純銀の量を指す。ゆえに、エドワード一世期の六シリング八ペンスは、含有する純銀量がほぼ等しいため、今日の一ポンド・スターリングと同一の貨幣価格とみなされる。